

講義名	特別講義（イノベーション・マネジメント）		
科目区分	特論科目		
担当教員	李 東浩		
開講期・曜日・時限	前期 金曜日 1時限		
	2018年度 大学院（修士課程） 修士課程（修士論文作成コース） / 2017年度 大学院（修士課程） 修士課程（修士論文作成コース） / 2016年度 大学院（修士課程） 修士課程（修士論文作成コース） / 2015年度 大学院（修士課程） 修士課程（修士論文作成コース）		
履修開始年次	1年生	単位数	2
		講義コード	51502

主題と概要

100年以上前にシュンペーター（1911）に提起された「新結合」を特徴としたイノベーションの概念は日本においては「技術革新」（内閣府（1956）『経済白書』）と誤認されて久しい。つい最近、製品開発など生産やモノづくりの領域だけでなく、流通販売など消費やコトづくりのサービスの範疇までもに拡大しつつある。つまり、製品イノベーションだけではなく、サービス・イノベーションもこの分野の射程に収められ、研究教育の膨大な知識が蓄積されている。

本講義では、受講者がこの分野の知識・能力を持つために必要な課題を選定し、文献レビューとディスカッションを行うことを通じて、受講者が研究を遂行していくためにこの分野に求められる基礎力を形成することを目指していく。

到達目標

大学院レベルで体系的・包括的にこの学問分野を学ぶ。経営学、組織論、戦略論の俯瞰的な視野で、イノベーションをモノ（製品）とコト（サービス）の両面から捉え、この分野の奥深さと幅広さを紹介する。古典的な文献と代表的な文献のみならず、最新の文献をも取り入れ、イノベーション分野に関する知っておくべき知識や理論パラダイムを習得する。

提出課題

1. 期末試験と期末レポートはない。
2. 毎回、1頁の読書ノートを全員が提出する。ただし輪番報告者は2頁を提出する。

評価の基準

1. 出席は義務。一回でも無断欠席すると不合格になる。
2. 毎回、事前課題を熟読したうえ授業参加する心構えが必要。
3. 報告者は報告を、参加者は質問を、また全員は積極的に授業へ討論・貢献をすること。

履修にあたっての注意・助言他

1. 大量の読書・ノートは必要。最低目安：報告者は毎週6時間、参加者は毎週4時間。
 2. 古典を運用する。学んだ古典文献を現実社会に運用・分析する。
 3. 能動的な集団学習。相互の啓発、知的な刺激が大事である。
- 毎回、受講者は事前課題を熟読したうえ授業に参加する心構えが必要である。輪読ではなく通読の形で全員参加する必要がある。毎回教員は問題提起・解題・点評・説明を、報告者は報告を（2頁・20分）、参加者は質問・討論（1頁）を、全員参加型授業で進める。

教科書

.使用しない。.

プリント資料及び参考文献

プリントは毎回、来週の資料を事前に配布する。
参考文献は、以下の授業計画に書いているように、14回分がある。

授業計画

- 1 イントロダクション：授業の進め方、科目の位置づけ、概要
- 2 イノベーションの起源と概念（シュンペーター（1912）『経済発展の理論』邦訳版1977 岩波文庫）
- 3 製品イノベーションとプロセス・イノベーション：生産性のジレンマ=A-Uモデル（アッターバック・アバナシー（1975, 1978, 1998）『イノベーション・ダイナミクス』）
- 4 イノベーションの発生と普及（小川（2000）『イノベーションの発生理論』、武石・青島・軽部（2012）『イノベーションの理由 資源動員の創造的正当化』）
- 5 イノベーションの時代特徴（プラハラード=クリシュナン（2009）『イノベーションの新時代』）
- 6 イノベーションのジレンマ：持続的 vs 破壊的イノベーションの論理（クリステンセン（1997, 2003, 2014））
- 7 アーキテクチャ・イノベーション（Henderson & Clark（1990）, Ulrich（1995）, Baldwin & Clark（2000））
- 8 オープン・イノベーション（チェスブロウ（2004）『オープン・イノベーション』）
- 9 サービス・イノベーション（近藤（2012）『サービス・イノベーションの理論と方法』、チェスブロウ（2012）『オープン・サービス・イノベーション』）
- 10 ユーザー・イノベーション：加護野・延岡・栗木・吉原（2014）『顧客との価値共創 一橋ビジネスレビュー2014春季号』、延岡（2011）『価値づくり経営の論理』）
- 11 デザイン・イノベーション（ベルガンティ（2012）『デザイン・ドリブン・イノベーション』）
- 12 リバース・イノベーション（ゴビンドラジャン・トリンプル（2012）『リバース・イノベーション』）
- 13 ビジネス・モデルのイノベーション（キーラー・ピツケル（2014）『ビジネス・モデル・イノベーション』）
- 14 ナショナル・イノベーション・システム（NIS）（野中・永田（1995）『日本型イノベーション・システム』）
- 15 キャッチ・アップ・イノベーション：模倣から創造へ（Kim（1997）Imitation to Innovation: the Dynamics of Korea's technological learning

予習・復習

読書と思考・討論を習慣に付けてください。

備考

全員、事前に資料と心構えを準備したうえ、授業に臨んでください。